

令和5年度〔自己評価報告書〕

学校番号	学校名	校長名
14	川崎市立向小学校	若狭 美加

学校教育目標	今年度の重点目標
<p>○すすんで学ぶ子 確かな学力の育成 ○自ら学び、自ら考える子 ○学び合い、高め合う子</p> <p>○思いやりの心をもつ子 豊かな心の育成 ○相手の気持ちを考える子 ○お互いのよさを認め合う子</p> <p>○健やかに育つ子 健やかな心身の育成 ○心も体も大切にする子 ○安心・安全に生活する子</p> <p>向っ子みんなの目標 ★むげんの力 すすんで学ぼう ★かわすあいさつ ささえる言葉 ★いつも元気な向っ子 ★いいとこ見つけ 自分もみんなも</p>	<p>○学習指導の充実 学びの中で自らの成長を実感できる学校</p> <p>○心の教育の推進 人とかかわりの中で心を育む学校</p> <p>○健康・安全教育の推進 子ども達の健康・安全を大切にしている学校</p> <p>○地域に開かれた魅力ある学校づくり 地域・保護者とともに子どもを育てる学校</p>

評価項目	具体的な取組	成果と課題	具体的な改善策
1 学習指導の充実	新学習指導要領への対応	校内研究を軸に、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進してきた。学習者の視点で授業を参観し、話し合いを行った。子どもを主語にして話すことにより、学習者のつまづきや戸惑いに気づくことができ、授業改善へとつながっていった。「学び合う」とはどういうことなのか、そのための授業展開の工夫など考えていくことができた。授業改善を行うことから、児童が自ら学びに向かう姿勢や友達と一緒に学習を組み立てていく姿が見られた。	どの教員も学習指導要領の内容を理解して、未来に生きる児童の育成に当たらなければならない。そのためにはどのような授業を行っていくかということを一一人が真摯に考えていく必要がある。来年度は今年度行った校内研究をさらに広げ、深めていくための手立てを探っていく。また、職員同士の学び合いができる学校体制を作っていく。時間の確保ややり方など工夫する必要はあるが、低・中・高学年部会を有効活用していく。
	カリキュラム・マネジメントの推進	基本的な感染対策を継続しながら様々な教育活動を行ってきた。コロナ前に戻すのではなく、今後持続可能な形で取り組めるように、ねらいやつけたい力を考えながら工夫改善した。特に水泳学習や運動会は、指導内容、安全管理等細かいところを確認しやり方を模索した。結果として、とても充実した活動になった。来年度は教科書が変わるため、カリキュラムの編成や見直しを行っている。	新年度の教育課程を考えていく際に、教科横断的な視点を持ち、行事等の見直しも一緒に考えていく。職員で共通理解を図りながら行事等の精選、内容の検討および各教科との関連を具体的に考えていき、一つ一つの活動において、適したものを選択しながら学習を進めることができるようカリキュラムマネジメントを進めていきたい。
	個別最適な学びと協働的な学びの実現	1時間の学習や活動の中で、個への対応に力を入れるときと協働的な学びを行うときなど、どのように授業を進めていくか授業設計に努めている。そして、メリハリのある丁寧な学習を心がけてきた。支援級や国際教室においては一人一人の特性や状況に対応できるようにしている。保護者アンケートにおいて、一人ひとりへの個別の対応や個別最適な学びの具体的な姿が伝わっていないことがわかった。	来年度も授業改善に取り組むうえで、個別最適な学びと協働的な学びの実現を心がけていく。合わせて保護者にも具体的にどのような対応をしているのかを学校として発信していく。職員の連携を大切にし、1時間の授業設計をどのように行っていくかを、職員同士の研修の中から学んでいくことができるような校内体制を整えていく。
	合理的配慮・特別支援教育の充実	一人一人の教育的ニーズに対応できるように、困り感を見とり、対応していくよう努めた。取り出しや入り込みなどによる個別対応の充実、通級や特別支援学校との連携も行ってきた。ユニバーサルデザインの環境づくりなども意識してきた。今後もすべての児童にやさしい教育環境を整えていく必要がある。	支援教育コーディネーターを中心に級外や教育活動サポーターなど対応可能な職員が連携し、一人一人の教育的ニーズに対応できる体制を整える。また、教員が基礎的環境整備や学習形態・ルールの工夫を心がけ、一次支援、二次支援を充実させていく。学校が組織として一人一人の児童に対応できる体制をつくる。
	校内・校外における研修の充実	校内研修では、前半は校内研修とリンクさせ「学び合い」について外部講師を招いての研修会や意見交換を行った。後半は学級経営についての意見交換なども行った。気がねなく意見を交わし合い、お互いに学び合える良い機会になった。職員からは、授業力向上を目指す意欲が感じられるので、学校としていかに学び合える機会をつくっていくかが課題である。	校内におけるOJTを充実させ、学校がお互いに学び合い、高め合う集団となるよう意識付けや体制を整える。計画的に学び合い、高め合えるような研修を引き続き計画していく。また、センターや各研究会における校外研修の機会を積極的に行うことへの意識づけも行っていく。
	GIGAスクール構想への対応	積極的に端末を使って授業改善に取り組む姿が見られた。子どもたちも端末の活用に慣れてきていることが感じられる。ステップ3としては、まだ十分ではない部分もあるので、学習の中で子どもが主体となっていくより効果的な活用方法を考え、それがどの教員にもできるようにしていくことが課題である。	低中高学年で、使用回数や使用方法に差が出てしまうのは仕方ないことであるが、効果的な使い方を職員同士の情報交換をもとに進めていく。また、ステップ3でのねらいをしっかりと確認し、子ども達が主体となる使い方を研修等を通して考えていく。

2	心の教育の推進	キャリア在り方生き方教育の充実	キャリア在り方生き方ノート、キャリアパスポートの活用を学校内で共通認識して取り組んできた。その基盤として、本校の「向っ子みんなの目標」をもとに「言葉を通して関わりをもてる子ども」をめざしてきた。そして、学校教育全体の中で、自分や相手の「思い」を大切にできるような言葉遣いの指導に取り組むことができた。言葉の大切さについては、学校と家庭の共通認識のもと、子どもたちに指導していきたい。	次年度の教育課程を編成する際に、キャリア在り方生き方ノートやキャリアパスポートを学校として系統的に有効活用することを心がけ、本校児童の課題の一つである自分や相手を大切にすることを育てていく。「向っ子みんなの目標」については、より実効性を持たせていくために、今後児童の意見を取り入れ、より学校全体の合言葉的なものとなるように見直しをしていく。
		人権尊重教育の充実	コロナの感染による差別やいじめが無いよう努めた。外国につながるのある児童が増え、国際教室において日本語指導の必要のある児童に対して丁寧に指導を行った。民族文化ふれあい事業においては、韓国の文化に触れることができた。そのような活動の中で、自己肯定感や他者理解の意識をさらに育てていくべきだと感じている。	マスクをはじめ考え方の違いに気を配っていききたい。道徳や特別活動などを中心に、日常の指導を通して、人権について自分事として学習する機会を大切にする。また、共生＊共育プログラムにおける効果測定もこれまで以上に有効活用できるように、計画的に取り組む。
		道徳教育の充実	考え議論する道徳として取り組んできた。学習に自信が持てず発言を控える児童も、道徳科においては自分の考えや思いを発言できるようになってきた。道徳科を中心とした学校全体の道徳教育が進んでいることを実感できた。今後さらに道徳科で学んだことを日常生活の中の道徳教育に生かしていくようにしたい。	新年度の教育課程を編成するにあたって、全教育活動を通して、道徳教育を行っていくことを再度確認する。学校教育目標と向っ子みんなの目標と道徳教育の全体計画のつながりを、しっかり意識していく。子どもたちの心の教育の中心として道徳教育の大切さは職員みんなで共通認識していく。
		共生＊共育の充実	年間計画に従って行い、効果測定の結果をクラス経営に活用した。一人一人の児童に目を向けつつ、学級集団としてのよさや課題に気づけた。SOSの出し方・受け止め方教育を行い、子どもたちが安心して声を出せることを伝えることができた。	効果測定の結果を心の教育全体の中で有効活用できるようにしていく。何のためにいき、どのように活用していくのか、職員研修が行えるよう校内体制を整える。来年度以降もSOSの出し方・受け止め方教育をカリキュラムに位置づけるとともに、人間関係作りにも有効活用する。
		行事・特別活動の充実	多くの行事を今後持続可能な形でできるように全職員で話し合いながら取り組んだ。行事を通してつけない力は何かということを確認しながら、取り組むことができた。運動会を春から秋の開催に変更したことで年度当初の活動にゆとりができ、委員会活動やクラブ活動、たて割り活動の充実が見られた。委員会やクラブ活動の立ち上げなどからも子どもたちの自主的な活動の幅が広がったことが感じられる。	子どもたち自身が自分たちで自分たちの学校をよりよくしてこうという意識が育ってきている。児童に任せる部分を増やすためにも、全職員で共通理解して教育活動に取り組んでいく必要がある。そのためにも今年度以上に活動を通してどのような力をつけるのか、変容の姿を求めるのかを明確にしていく。
		いじめ防止対策の推進	いじめの未然防止・早期発見・早期対応に努め、学校全体として情報共有できる体制を整えた。共生共育プログラムや学校生活アンケートの活用により、確実に状況を把握するよう努めた。いじめ防止基本方針の内容を全職員が意識して指導していくよう徹底していきたい。	いじめ防止基本方針に確実に目を通す機会を設ける。すべての教職員の風通しを良くすることで、素早く対応できるようにする。また、いじめへのセンサーを積極的に働かせ、些細な事案においても複数体制で対応することを徹底する。また、全体での共有を丁寧に行っていく。
3	健康・安全教育の推進	新型コロナウイルス感染症対策、熱中症対策の徹底	ガイドラインに沿って、基本的な感染対策の徹底と教育活動の工夫を両立することに努めた。管理職・養護教諭が中心となり、学校としての対応や変更点などについて全職員で共通理解することができるよう情報伝達を行った。熱中症対策においては、年間を通して水筒を持参するなど安心して水分補給ができるようにした。熱中症指数計測器を利用し、活動前の判断基準とした。暑さが厳しい時の活動において、児童の様子を丁寧にみとっていくことを学校全体で共通理解していくことが大切である。	引き続き丁寧な健康チェックや基本的な感染防止対策を行いながら安心・安全な教育活動に努めていく。地域や保護者とも情報を共有できるように伝えていきたい。熱中症指数が活動するうえで目安になるが、それだけで安心することなく、子どもたちの様子を細やかに観察していくことを徹底していく。ミストの散布やテントで日陰を作るなどできることをやっていく。気温の高い時期が長くなる傾向があるので、カリキュラムの編成にも注視していく必要がある。
		体力向上につながる取り組みの充実	体育の学習や休み時間の外遊びの充実により、体力向上に努めた。委員会活動を中心とした児童の主体的な活動においても外遊びや大縄に取り組む機会を作るなど学校全体で活動の工夫が見られた。中休みの体育館の開放を行い、雨や気温上昇で校庭が使えない時も運動できる機会を作った。栄養職員と連携し、食育にも努めた。体育学習に制限があったため、カリキュラムの見直しをした。	外遊びが好きなお子が多いのが本校の特徴でもある。そんな児童たちがさらに体を動かすことを楽しめる機会を積極的に作っていききたい。今後も委員会活動や児童会活動を軸に、児童の主体的工夫を多く取り入れて行けるよう柔軟な対応を行っていく。また、食育は栄養職員と連携し、計画的に進めていく。

4	地域に開かれた魅力ある学校づくり	日常的な健康・安全教育の推進	日常的な保健指導をはじめ、校内の衛生管理については、感染症対策を軸に丁寧に行ってきた。養護教諭を中心に児童の心身の不安に対して情報共有しながら対応してきた。学校評価において、「早寝早起き」に課題があることがわかった。避難訓練は、計画的に様々な状況を想定して行ってきた。自然災害における安全対策や避難計画の幅をひろげる必要がある。	基本的な感染対策である手洗いやうがいなどの日常の衛生習慣を大切にしていきたい。早寝早起きの大切さ等を伝えると共に、自分の心と体の健康に目を向けさせ、健やかな成長につなげていきたい。避難訓練は緊張感をもって指導を徹底する。職員の連携を強化して、児童の心身の健康を図っていく。具体的な場面を想定した訓練を考えていきたい。
		危機管理体制の整備	校舎の老朽化が目立つため、施設・設備の点検・修繕に努めた。校舎再生工事に向けての安全対策を徹底した。危機管理マニュアルに基づいて校内体制の確立に努めた。未然防止・早期発見・初期対応を確実に行う組織となるため、年間を通じて危機意識を高めるような話をしてきた。避難所運営会議では、本校独自の対応を地域に周知することに努めた。	日常の安全点検の徹底に努める。また、様々な危機を認識しておくことが大切であるとする。職員で、研修を行うなどして対応力を高めていくとともに、報道連による連携の大切さを伝える。地域に本校独自の避難マニュアルを広報し、災害時にスムーズに対応できるようにする。あと2年続く再生工事に伴う安全管理も引き続き取り組んでいく。
		地域との交流の再開	学校運営協議会や地域教育会議、民生委員情報交換会において、直接地域の方と話をすることができ、関係作りができた。また、登下校の見守りなどは継続実施していただき、感謝している。今後もしてもらうだけの関係にならないようにしていくことが大切である。	登下校時の見守りなど、地域の方々のご協力に感謝し、今後も良好な関係を築いていくよう努める。そのためにも、日ごろから挨拶をはじめ、感謝の気持ちを伝える機会を作るなど、積極的にコミュニケーションをとっていくようにする。地域行事などへの協力も可能な形で行っていく。
		地域の人材・環境を生かした活動の再開・継続	地域学習は、基本的な感染対策をとりながら、再開できる内容については、校外で直接地域の人から学ぶ機会を作るなどの学習をすすめてきた。読み聞かせボランティアなど、カリキュラムの中でより良い形で再構築できた。大島保育園等の幼保小連携を充実させることができた。以前行っていた遊びびなど再度取り組むか検討が必要である。	実際に地域に出て、地域に暮らす人たちの声を直接聞くことはとても有意義な活動である。また、学校に来ていただき、児童とコミュニケーションをとる中で学習に協力していただくことも大切なことだと考えている。カリキュラムの中に地域とのかかわりを効果的に位置付けていく。
		地域・保護者との連携	子どもたちのためにできることをしていこうという気持ちをもって、PTA活動を進めてきてくださったことにはとても感謝している。子どもたちが喜ぶ秋祭りを計画・実施するなどPTAと学校が連携して取り組めたことに大きな価値を感じる。今後地域も含めた活動を考えていく。	PTA役員のなり手がなかなか見つからず、苦勞している。それでも、自らやろうと名乗り出てくれた方々への感謝の気持ちを忘れず、連携していく。また、学校評価の結果をもとに、地域・保護者の期待に応えることができるよう真摯に教育活動を行っていく。
地域・保護者への情報公開・情報発信	学校ホームページは最低限の形は整えてきた。さらに改善の余地はある。学校からの情報は主に学校便りや学年便りなどのお便りで伝えている。学校・児童の様子をはじめ、向小学校のめざしている方向を理解していただけるよう内容を工夫している。来年度は、学校便りと学年だよりを一体化していき、内容の重複を避けていきたい。情報の発信方法や内容はより良いものをめざしていく。	毎月の行事や学校全体で知らせる内容が多くなることから学校便りと学年だよりを一体化する。行事予定に下校時刻を記載していく。また、ホームページの充実や配信メール、LOGOフォームやグーグルフォームなど様々な方法を駆使して情報の伝達や受け取りを行っていく。授業参観や懇談会など直接学校にきていただく機会も大切にしたい。		
地域社会における役割を自覚	学校は地域の様々な活動の拠点になっていることを自覚し、学校施設開放や避難所運営会議とかかわってきた。お互いの声に耳を傾け、良好な関係作りを努めてきた。児童の遊び場として、放課後の校庭開放の活用を促し、開放時間を拡大した。学校にはできることできないことがあることを理解してもらうことが大切である。	今後も地域の方にとっての学校に対する期待にこたえられるように、誠実に地域の方々と付き合っていく。そのために、話し合いの機会を大切にしていく。校庭開放プロジェクトや市制100周年の緑化フェアなどの取り組みにおいてもより良い形で進めていけるよう努める。		

学校関係者の評価	今年度の学校運営のまとめ・次年度へ向けて
<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもたちが自分の学校をよくしようと活動していることがわかった。</li> <li>周りの仲間を巻き込みながら活動していることがよくわかった。今後もまだまだ工夫の余地があるだろう。</li> <li>子ども達が主体的に活動していることがわかった。</li> <li>子ども会議の運営がよくわかった。学校全体の課題を提案したり、各委員会の活動を紹介したりなどして学校内での組織として機能していると感じた。</li> <li>川崎市制100周年にむけて、音楽や運動などを使ってみんなが1つになることに取り組んでほしい。</li> <li>地域と学校と今後もしっかり情報共有を行って、子ども達のためにやっていきたい。特に公園の使い方など。みんなの校庭開放プロジェクトの状況に合わせて、地域の声掛けも変わってくるだろう。</li> <li>コロナ禍で止まっていた活動が動き始めていることを感じた。来年度もそれぞれの場所で頑張ってほしい。</li> <li>幼保小の連携事業が様々に行うことができた。年長児の学校訪問を教育課程に入れていただけたことがよかった。</li> </ul>	<p>今年度は、運動会を秋開催に変更したことにより、学年・学級開きの時期に余裕が生まれた。各学年、学級において児童と担任と一緒に1年間の目標を考えていくことができ、落ち着いた雰囲気となった。また、様々な行事や教育活動についても職員で方向性を確認しながら丁寧に取り組むことができた。校内研究において「児童を主語に考える」ことを意識しながら、授業研究や協議会を行ってきた。「児童の主体性」を大切にするためにはどのような授業を行っていけばよいのかを考え、実践した。主体的な学びにつながるよう授業改善をしていくことで、児童が楽しそうに、真剣に学習に取り組んでいた。GIGA端末の積極的な活用なども見られる。さらに、個別学習や入り込みなどにより、一人一人の困り感に寄り添うように努めたことも児童の落ちつきにつながったと思われる。日々の生活の中でも子ども達の考えを大切に担任の姿が多く見られた。特に高学年において自主的に活動を創り上げていこうとする意欲や姿が、学校全体の意欲向上に大きく貢献していた。子ども達の活動を支援する職員の温かな見守りがあってこそだと思う。</p> <p>子ども達は自主的に様々な教育活動に取り組んでいるが、大きな課題として学習の定着ということが挙げられる。学習に向かう環境は整ってきているが、子ども達一人一人の学習への意欲や学んだことを活用していく力には課題がある。自己肯定感を高めるためにも、学習したことが実生活とどのようにつながっていくのか、学習したことを応用させる力などにも力点を置き、子ども達の達成感や満足感を高めていきたい。</p> <p>全職員が同じ方向をみながら学校運営に関わっており、協力体制がとれた一年であった。来年度も職員一人一人の個のやる気や努力を大切に、この組織力・団結力をさらに高めていけるよう、みんなで切磋琢磨していきたい。職員が自己肯定感を高く持ち、自己有用感を感じることは、子ども達に大きな影響を与えることにつながると思う。そのためにも職員が自らが学校運営に携わっていることを意識しながら、自ら様々なことに動き出せる集団であり続けられるよう努めていきたい。</p>